

クラス	TU109	担当教員	山本 秀人
テーマ	乳幼児期の発達研究—運動発達・認識発達・ことばの発達を題材に—		
著書・論文 研究課題等	<p>著書：『0～5 歳児のたのしい運動あそび』（分担執筆）いかだ社，2010 年，『幼児期運動あそびの進め方』（分担執筆）創文企画，2009 年，『0～5 歳児水遊び・水泳を 100 倍楽しむ本』（単著）いかだ社，2007 年</p> <p>論文：「プールを楽しむために大切にしたいこと」『ちいさいなかま』草土文化，2009 年 7 月号，「幼児体育における『わかる』と『できる』の関係—『マット運動』の実践分析から」『日本福祉大学社会福祉論集』第 116 号，2007 年，「幼児体育における教科内容と教材の関係—『ラグビーパスボール』の実践分析から—」『日本福祉大学社会福祉論集』第 114 号，2006 年，</p> <p>研究課題：乳幼児期の運動発達（運動学習）と認識発達の関連について，幼児期に適した運動教材について，幼児期の運動指導法について</p>		
ゼミナール概要			
キーワード：運動発達、認識発達、ことばの発達、教材研究、指導法			
<p>目的、内容、方法、授業計画等：</p> <p>乳幼児期の子どもたちは、歩いたり・走ったり・跳んだり・投げたり・蹴ったりという基礎的な運動能力、さらには文化的素材である「ボール運動」などがもっている教材固有の運動技術の獲得など、意識的・能動的な活動によって多様な運動発達を遂げていきますが、その背景には認識活動を介在する運動学習が存在しています。</p> <p>しかしながら、「運動ぎらい・体育ぎらい」の兆候が 4 歳・5 歳児期の子どもたちにははじめることもあります。そこには、「できる—できない」「うまい—へた」「勝ち—負け」など、自分と友だち、さらには友だち同士の違いについて、技術認識を媒介としながら客観的にわかりはじめていくことが関係しています。</p> <p>これまでの保育所・幼稚園における運動や体育実践では、「がんばれ、がんばれ」ということばかけだけにおわっていないでしょうか。「がんばれ、がんばれ」と言われても、うまくできない子どもはどこをどのようにがんばればいいのかかわからないのです。</p> <p>「運動ぎらい・体育ぎらい」の子どもは、もともとぎらいだったのではなく、なんらかの原因によってぎらいにさせられてしまうのです。</p> <p>そのような子どもたちをうみださないためにも、乳幼児期固有の運動発達・認識発達・ことばの発達の関連性をふまえたうえで、各年齢で子どもたちに認識させたい対象（わからせたい内容）を保育者が科学的・系統的に選択し教材化し、保育活動を展開していく必要があります。</p> <p>本ゼミナールでは、乳幼児期の運動発達・認識発達・ことばの発達を題材にしながら、(1)子どもの発達にとって運動の果たす役割、(2)保育所・幼稚園における体育の役割（子どもたちに体育で何を教え・伝えるのか）、(3)教材研究、(4)すべての子どもが「できて・わかり・おもしろい」と思える指導内容とその方法のあり方、について検討していきます。</p> <p>3 年次には、以上の 4 点を、文献学習・ゼミでの実践・見学・研究会（「全国保育問題研究集会」「全国保育団体合同研究集会」「学校体育研究同志会全国大会」）への参加を通して学習・研究し、サブゼミ単位によるゼミ論文をまとめます。4 年次には、それぞれの関心に基づき研究テーマを設定し、卒業論文を完成させます。</p>			
担当教員からのメッセージ			
<p>(1) 個人およびサブゼミによる事前の学習を前提としてゼミナールを展開していきますので、そのための努力を惜しまないことを望みます。とにかく、学習もあそびも全力投球しあいましょう。</p> <p>(2) ゼミ合宿（3 年次春、4 年次夏）は、全員参加を原則とします。</p> <p>(3) 研究会（6 月および 8 月）への参加を予定しています。最低 1 つには必ず参加してもらいます。</p> <p>(4) 運動・体育が大好きな人はもちろんですが、いまだに運動ぎらい・体育ぎらいの人は特に大歓迎です。</p>			